銭形平次捕物控

美しき獲物

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、ちよいと江戸をあけますがね」

八五郎はいきなりこんなことを言つて來たのです。彼岸を過ぎたばかり、秋の行樂の旅にはまだ早過ぎますが、海道筋は新凉を追つて驛馬の鈴の音も、日毎に繁くなる頃です。

「江戸をあける？――大層なこと言やがるぢやないか、日光へ御代參にでも出かけるのか、それとも――」

錢形平次は滅法忙しいくせに、相變らず暇で〳〵仕樣がないやうな顏でした。空茶を鱈腹呑んで、無精煙草を輪に吹いて、安唐紙の模樣を勘定し乍ら、解き切れなかつた幾つかの難事件を反芻し、人と人との愛慾の葛藤の恐ろしさに、つく〳〵〝＼捕物稼業が嫌になつて居る矢先でした。

「からかつちやいけません。江戸をあけると言つたところで、ほんの三四日。町内の氣の合つたのが、江の島に落合つて、祭の相談でもしようといふ寸法なんで」

「來年の祭の相談は早手廻し過ぎはしないか」

「鬼なんざ笑つたつて、驚くやうな手合ぢやありませんよ。何しろうまいこと用事を拵へて、八方から集まるのがざつと十三人、――どの仲間へも入れなかつた、あつしと相模屋の若旦那

の榮三郎が、それを江の島まで迎へて、三日ばかり海を眺め乍ら底拔け騷ぎをやらうといふ計略なんで」

「計略と來やがつたな」

「あつしは御用繁多で江戸を拔けられず、相模屋の若旦那は御新造がやかましくて、物詣での町内附き合ひもさせてくれねえ。そこでこの二人は、相談をして、そつと拔け出し、仲間と江の島で落ち合つて、相模藝者を總嘗めにしようといふ、謀叛を企てたわけで——相模屋には默つてゝ下さいよ。拔け出すのは、明日の曉方の正七つ、まさしく寅の一點」

「お内儀さんに隱れて遊びに行くのを、謀叛でも企らむやうに思つてやがる。良い氣なものだよ、——お前の御用繁多も笑はせるぜ、泥棒猫を追つかける爲に、十手をお預かりしてゐるわけぢやあるめえ」

「叶はねえな、親分に逢つちや——ところで、あつしが旅に出ると二日でも三日でも向柳原一帶は空つぽになるでせう、——相濟みませんがその間、誰かにチヨイチヨイ覗かして頂き度いんで。ヘツ、お安い御用で」

「あんな野郎だ、——でも、お前もたまの保養だ、行つて來るが宜い。とても、八五郎親分ほどの睨みはきくめえが、お前の叔母さんにも御無沙汰して居るから、俺が時々覗いてやるよ」

「相すみません」

八五郎は膝小僧を並べて、二つ三つお辭儀をしました。久し振りに江戸を離れて、片瀨から

江の島とのし廻し、炭坑節とトンコ節の大氾濫でも喰はせようと言つた、野望に燃えて居る八五郎だつたのです。

それが九月の十日、その翌る日の九月十一日は、八五郎は相模屋の若旦那と共に、逃げ出すやうに旅へ出た筈、三日目の九月十二日になつて、平次は漸く向柳原の八五郎の厄介になつて居る、叔母さんの家を訪ねる氣になりました。

まだ五十になつたばかり、元氣ものの叔母さんは、賃仕事などをして、健氣に後家を立て通して居ります。八五郎はその二階に住んで、食扶持くらゐは出して居る筈ですが、頻繁にお小遣を借り出すので、叔母さんの懐ろ具合のプラスになる筈はなく、そのくせ人の良い叔母さんは、八五郎に良い嫁を貰つてやつて二階に新世帶を持たせたい望みで、胸をふくらませて居るのでした。小鳥が巢を營むやうに、昆虫が網を張るやうに、さう言つた意味もない本能の望みで、何んと無知で強力で、見境ひもなく自分の後繼者を庇護して行くことか。

明神樣の下で名物の煎餅を買つて、それをお靜が小風呂敷に包んでくれたのを土産に、平次が向柳原に向つたのは、もう辰刻近い頃でした。

「叔母さん、お早やう、——いつも元氣で結構ですね」

平次は此叔母さんが好きでした。向う意氣が強くて、勤勉で、そして清潔な五十女。八五郎を自分の伜のやうに可愛がつてる叔母さん。こんな人と、煎餅を噛り乍ら、茶を呑む半刻の樂しさを勘定に入れ乍ら訪ねて來ると、

「あ、錢形の親分、大變なことがありました。先刻使を出したばかり」

と、叔母さんは、甥の八五郎が乘り移つたほどのあわてやうで、格子の外の平次の胸倉を掴みさうにするのです。

「どうしたんです、叔母さん。何が大變なんで？」

「だつて、あの子の留守を狙つて、町内に人殺しがあつたんですよ」

「人殺し？」

「それも、當てつけたやうに、あの子と一緒に江の島へ行つた、相模屋の御新造が、若旦那の留守中に殺されるなんて」

「――」

「あの子さへ居てくれたらねえ、本當に」

あの子と言ふのは、申す迄もなく、三十男の馬の如くでつかい八五郎。それは宜いとして叔母さんの八五郎に對する期待は、かくの如く重大だつたのです。

二

町内の相模屋といふのは、詳しく言へば、佐久間町三丁目の古い酒屋で、近所に武家屋敷の常客が多く、何代にも亙つて榮えましたが、先代榮右衛門の頃から左前になり、お向うの飼鳥

屋敷の長屋門と、新し橋の袂に居る乞食の鼻と共に、向柳原の『潰れないものの三幅對』にされて居りましたが、五年前お吉といふ嫁が來てから、その持參金でメキメキと身上を持ち直し、今では外神田から下谷へかけての、良い店になつて居りました。

その大事の嫁、相模屋の大黒柱のやうな嫁のお吉が、二十八の働き盛りを、人手に掛けて——しかも夫の榮三郎の留守中にやられたといふことは、まことに以て容易ならぬ事件に違ひありません。

叔母さんの説明を聽き乍ら、平次は佐久間町三丁目に向ひました。

「あ、錢形の親分」

氣の良さささうな主人の榮右衞門。今は隱居同樣と言つても、六十そこ〳〵の耳は少し遠いが、見てくれは達者さうな舅が迎へてくれました。一代に身上をいけなくして、一度は相模屋の身代限りを傳へられただけに、恰幅は立派でも、何處か、泣き出しさうな感じの老人でした。

「早速だが、現場を見せて下さい」

「どうぞ此方へ、——まだ駒込の嫁の親も參りません。生憎倅は留守で、たまに嫁一人だから、寢るだけ寢かしてやらうと、陽の高くなるまで放つて置いたので、こんなことになつて居ようとは氣も付きませんでした」

「なるほど」

店を入つて、中庭のやうな土間を抜けると二た間の離室、六疊と四疊半で、其處が、倅夫婦

の部屋だつたのです。

一と足入ると、四疊半の次の間を隔てて、中は一と眼です。嫁のお吉は一度起上がつたらしく自分の床の上に坐つたまゝ、喉笛を掻き切られて、横つ倒しに、血潮の中に、虫のやうに死んで居るではありませんか。

見たところ、三十過ぎにも見えますが、それは氣性者によくある線の堅さから來る感じで、二十八の豊滿な大年増、鼻も顴骨も高く顎が開いて、決して醜いといふ程でなくとも好感の持てる顔ではありません。その戰闘的な感じのする女——まだ二十八の、充分に生活力の旺盛なのが、右の頸動脈から喉を貫かれ、それを刺した脇差は、疊の上に突つ立つて居るのは恐ろしいことでした。

「伜の馬鹿野郎が、嫁に小言を言はれるのが辛さに、昨日の朝早く拔け出して、八五郎親分と一緒に、江の島に行つたと、昨日の晝近くなつてから、近所の方や、八五郎親分の叔母さんに聽きました。——まるで夜逃げでもするやうに、近所の方に辨當まで拵へて貰ひ、草鞋やら脚絆まで、軒の下に用意して置いたんだと聽いては、腹も立ちません。呆れ返つた野郎で」

主人の榮右衞門は、場所柄も構はず、平次をつかまへては愚痴を言ふのです。

「最初に見付けたのは」

「私でございました」

細々とした娘が榮右衞門の後ろから顔を出しました。お峯といふのださうで、主人榮右衞

門の末の娘、若旦那の榮三郎の妹で、十八になる、病身らしいが、悧巧さうな少女でした。

「何處か戸は開いて居たのかな」

「いつにもなく遅いので表から聲を掛けて見ましたが、返事がございません。少し氣味が惡くなつて、離室をグルリと廻つて見ると、向う側の窓の戸があいて、見通しになつて居りました」

お峯はその時のことを思ひ出したらしく、ゴクリと固唾を呑むのです。

今も開いて居る窓から、此慘憺たる樣子を覗いたとしたら、これは若い娘に取つては、恐怖以上のシヨツクだつたでせう。

「窓は中から締めて居たことだらうな」

「それはもう、申す迄もないことで。用心深い嫁でした」

榮右衛門の言葉を聽いて、平次は、その開いて居たといふ窓を調べて居ります。

が、その調べが進行するにつれて、平次の樣子は緊張がひどくなり、恐ろしく念入りになつて行くのです。

「御主人は、この窓を調べて見たことはありませんか」

「倅夫婦に任せきりで、この五年越し離室を覗いたこともありません」

「この窓に心張棒はないので？」

「雨戸が嚴重に出來て居ります。印籠ばめになつて居る上に、上下の桟があり、心張にも及ぶまいと思ひますが、——私は耳が遠いので、戸締りや用心はやかましい方で」

主人の榮右衞門は自分の財布のやうに、この離室の締りを信用して居る様子です。

「ところが、その桟がきかなくなつて居るが」

「えツ？」

「敷居の穴には、この通り小石が一パイ詰つて居るし――おや、この小石は風で吹飛ばされたり、箒で掃き寄せられたものぢやない。わざ〳〵穴に詰めて上から叩いたものだが」

「そんなことが？」

主人の榮右衞門は、一應不服らしいことを言ひましたが、實際敷居の穴を覗いて見て、平次の言葉を承服しないわけには行きません。

「そればかりぢやない」

平次は窓の戸を二枚外して、念入りに調べて居りましたが、到頭大變なことを見付けてしまつたのです。

「何にかありましたか、親分」

のぞく主人の前へ、上の方の桟のある、一枚の戸を見せました。

「この通り、上の桟は、鋸で切つてある。こいつは外からぢや細工は出來ない。一度雨戸を外した上の細工だ」

「すると？」

「内の者の仕事でなきや、誰か、家の者の氣のつかない時、此部屋に入つて細工をした者があ

る筈だ。心當りはありませんか」
「ハテ、そんな筈はないと思ひますが」
「これぢや、上の棧も下の棧もきかなくなつて居るから、締めたつもりでも何んにもならない。曲者は勝手なとき外から入つて、勝手なことが出來たわけだ」
「怖いことですね、親分」
主人の榮右衞門は本氣に震へて居るのです。

三

「ところで、此脇差に見覺えはありませんか」
平次が、無氣味な脇差を引つこ拔いて主人に見せました。
「それが、その」
榮右衞門は妙に答を躊躇すると、
「父さん、皆んな申上げた方が宜いでせう。どうせわかることだし、兄さんは一昨日から居ないんだから」
妹のお峯はそつと囁きます。
「伜のものでございますよ。聟入の時使つてそれつきり此部屋の箪笥の引出しに投り込んであ

りましたが――」

榮右衛門が答を濁るのはその爲だつたのです。蝋色塗の鞘は、死骸の側に投り出されてありますが、脇差はなか〳〵の業物らしく、一氣に嫁のお吉の喉笛を切つた上、疊に突つ立てた工合は、曲者の腕の力だけでは説明がつきません。

「昨夜、この離室へ曲者が來たのは、眞夜中過ぎのやうだが、母家の方で、氣のついた者はありませんか」

「何分此處から離れて居りますから」

こんなことでは、一向埒があきさうもありません。

「お父さん、駒込の父さんが――」

娘のお峯が、そつと父親にさゝやくと、その後ろから、恐ろしく荒つぽい調子で、

「娘がどうかしたさうぢやありませんか」

飛込んで來たのは、嫁の父親の駒込の長五郎といふ、良からぬ事で金を拵へたと言はれて居るが、兎も角も山の手一杯に顏を賣つて居る中老人でした。

「駒込のお父さん、飛んだことになりました」

弱氣の榮右衛門は、惡戲つ兒が、惡戲を見付けられでもしたやうに小さくなるのです。

「飛んだことぢやありませんよ。誰が斯んな虐たらしいことをしたんです。相模屋さん」

「それがわからないので、錢形の親分に來て頂きました」

「聟の榮三郎はどうして居るんです」
「江の島詣りに、町内の人達と一昨日の晩出かけましたよ」
「斯んなときに、配偶が居ないなんて」
長五郎は憤怒のハケ口に困つたらしく、何處へでも噛みつくのです。
「直ぐ迎ひの者を出しましたが、何分十何里も先のことだから、早くても明日の朝でなきや戻りません」
「戸締りは嚴重だと、日頃娘が自慢をして居たが、下手人はいづれ、家の中の者だらうね。錢形の親分」
駒込の長五郎は、其處に集つてゐる、家中の者の顏を見比べて、最後に平次に問ひかけるのです。
「さうとも言へませんよ。戸締りは嚴重なやうだが、雨戸の棧に細工がしてあつて、内では締めたつもりでも、外から何んの造作もなく開くやうになつて居るから」
平次は一應は辯解してやりました。娘の死に逆上せあがつたこの強氣一點張りの男は、何を言ひ出すかもわからなかつたのです。
「それぢや、矢張り内の者の細工ぢやないか。江の島詣りと見せかけて、その晩そつと歸つて、窓から自分の部屋に忍び込む術もある」
駒込の長五郎の舌は、遠慮もブレーキもきかなくなつて來るのです。

「何を仰しやるんで？　それぢや、まるで、伜が下手人だと言はないばかりぢやありませんか。いくらお吉の親御でも、聞き捨てになりませんよ」

柔和な榮右衞門も、さすがに腹を据ゑ兼ねた様子です。

「ま、ま、待つて下さい。佛を前に置いて、親同志の喧嘩は大人氣ない。相模屋の若旦那には、八五郎が一緒について、江の島へ行つた筈です。昨夜宿をあけたかあけないか、人をやつて訊けばすぐわかることです」

平次も見るに見兼ねて、二人の老人の仲に割つて入りました。強氣の長五郎は言ふ迄もなく、弱氣で柔和な榮右衞門もすつかり興奮してしまつて、何をやり出すかわからない様子だつたのです。

兎も角も、平次は駒込の長五郎を誘つて庭につれ出し、あとは近所の人が寄つて、葬ひの仕度になりました。主人の榮右衞門は駒込の長五郎にカキ立てられた憤怒がなか〳〵納まり兼ねる様子ですが、手代の時松、妹娘のお峯、隣りの主人多之助の弟で、多見治などに慰められて、どうやら葬ひの仕度に打ち込む氣になつた様子です。

佐久間町三丁目では、大した廣い庭のある筈もありませんが、平次は母屋の裏へ廻つてどうやら人目から遠ざかりました。物置の濡れ縁に腰をおろして、扨てと訊くのです。

「駒込の長五郎親分が、あんなところで言ひ合つちや、見つともないぢやありませんか」

地位にも金にも顔にも不足はなく、山の手で親分扱ひをされてゐるボスの親方は、江戸で高

名な御用聞の平次を、物の數とも思つては居ない様子です。

「さうは言ふが、錢形の親分。俺は娘一人を捨てたと思ふと、腹が立つて腹が立つて、たまらないのだよ」

長五郎は何やら忿々として、わき上がるやうな憤怒を抑へかねて居る様子です。

「何が一體氣に入らないんで？」

「聽いてくれ、錢形の親分。娘のお吉が、相模屋の息子の榮三郎に惚れて、我儘を言つて此處へ嫁に來たのが五年前だ。親分も知つてるだらうが、榮三郎は歌舞伎役者のやうな好い男だ。その時の持參金が三百兩、それから五年の間に、五十兩百兩と貢いだ金が、千兩ではきかないだらう」

「――」

「相模屋の店は立ち直つた。潰れかけた身上が直つたばかりでなく、近頃は外神田から下谷へかけて指折りの店になつた、――娘のお吉は氣性者だから、働きのない舅と聟を追ひ廻して、何時の間にやら相模屋を一人で切り廻し、身上は肥るばかりだ――が、女は悧巧なやうでも、妙なところに手ぬかりがある。紅白粉の化粧も忘れ、身上第一と眞つ黒になつて働いてゐるうちに、聟の榮三郎が浮氣を始めた」

「――」

「相手は藝子あがりのお朝といふ女。それは綺麗だといふことだが、三味線堀に圍つて三日に

一日は家をあけるといふことだ。今になつては、俺も腹を立て、當人の娘も後悔したが、此方から追ん出ると、注ぎ込んだ千兩以上の金は、一文も戻らないことになる、――さて、此んな有樣で、夫婦も舅と嫁も、唯み合ひになつて居るとしたら、大方下手人はわかるぢやないか。ね、錢形の親分」

駒込の長五郎は、一流の達辯でまくし立てるのです。

この推理は極めて簡單ですが、一番疑はしい筈の夫の榮三郎が、江の島に行つて居り、昨夜八五郎と一緒に呑んで居たとすれば、長五郎の疑ひは、全く據りどころのないものになつてしまひます。

念のため、家中の者に逢つて、聽くだけは聽いて見ましたが、殺された嫁のお吉は、男のやうな氣性の女で、浮いた噂などは一つもなく、手代の時松は、昨夜横川町の親類へ法事があつて行き、一と晩泊つて今朝戻つて來たことがわかつて、全く疑ひから除かされてしまひました。

父親の榮右衞門は恰幅こそ立派ですが、病身で弱氣で、その上、嫁が死んでしまへば、駒込の長五郎からの援助が絶たれるので、何より身上が大事の榮右衞門は下手人である筈もなく、さすがの平次もハタと閉口しました。

下手人は豫め窓の戸に細工をして、外から入つたとしても、相模屋は貧乏酒屋だつた昔から、世間の評判の良い店で、人に怨まれる筈もなく、一番よく相模屋の世話をして居る隣りの地主で、喜の屋多之助といふ中年男は、相模屋の榮三郎や、八五郎などと一緒に江の島に行つて留

守。その弟の多見治は、これは良い男ですが、二十七の獨り者で、兄嫁のお若と、早くからやつて來て、何彼と働いて居りますが、男つ振りが好い癖に、足が惡くて世間並の力仕事も出來ず、手傳ひをすると言つても大したことが出來る筈もなく、皆んなの邪魔にならないやう、隅の方に引つ込んで、氣を配つて居るだけのことです。

四

窓の外には一つも足跡はなし、平次も此上は、せんさくのしやうもありません。證據といふのは、嫁のお吉を刺した脇差だけ。それも夫の榮三郎の持物では問題にならず、此上は、世間の噂を集めて、何にか暗示を掴む外はなかつたのです。

裏口からフラリと出ると、

「錢形の親分さん」

後ろから小さい聲で呼ぶ者があります。振り返ると、足は惡いけれど、好い男の多見治、それは隣りの裕福な地主の弟と平次も知つて居ります。

「何んだえ、多見治さん」

「少し親分さんのお耳に入れ度いことがありますが」

「どんな事でも、話して見てくれ」

平次も足を淀ませました、何にか人に聽かれ度くない話がありさうです。

「親分さんは、とうに氣が付いたでせうが、お隣りの御新造を殺した曲者は、外から入つたに違ひありませんね」

「私も、多分そんなことだらうと思つてるよ」

「今日は九月の十三夜、昨夜も良いお月樣でした。私は曉方近くフト目をさまして、どうも寢つかれさうもないので、雨戸を開けて緣側から外へ出て見ました。月に浮かれたやうな心持で、路地へ出ると、そこは相模屋さんの裏口と差向ひになつて居ります。と、その裏口から、人が飛出して、私が居るとも氣がつかずに、新し橋の方へスタスタ行つてしまひました。恐ろしく背の高い男でございました。と、後から若い女が、裏門の中で、それを見送つて居るやうで御座いました」

「待つてくれ。背の高い男といふと、相模屋の手代の時松ではないか」

「さア、私の口からは、確としたことは申されませんが」

「見送つて居た女といふのは、すると、相模屋の妹娘のお峯かな」

「さア、そこまでは」

「二人は仲が良いといふのだらう」

「それも、私にはわかり兼ねますが」

平次は多見治と話し乍ら、何時の間にやらその家の庭木戸を入つて居りました。

「入らつしやいまし」

聲をかけられて、フト顔を擧げると、多見治の兄の多之助の女房、これもなか〳〵に美しいお若といふのが、愛想よく迎へて居ります。

「それぢや、氣の毒だが、此處へ相模屋の手代の時松を呼んでくれないか。お葬ひの仕度の最中、十手を振りまはすでもあるまい」

「それでは、私が告げ口をしたやうで、甚だ拙いことになりますが」

「それは大丈夫だ。お前の名前は出さないやうにするから」

平次は散々に説いて、漸く多見治をやりました。多見治はどう言ひ拵へたか、間もなく手代の時松をつれて來たことは言ふ迄もありません。

「おや、錢形の親分」

時松は何んと言はれて誘ひ出されたか、平次の顔を見ると、さすがにギヨツとした様子です。

「少し訊き度いことがあつて此處に呼び出して貰つたが、隱さずに皆んな打ち明けて話してくれ」

「ヘエ」

「第一番に、お前は昨夜横川町の親類の法事で出かけ、一と晩泊つて今朝歸つたと言つたが、——それに間違ひはないだらうな」

「ヘエ」

時松はひどくオドオドして居ります。

「お前の姿は、人目を忍ぶにしては、ノツポ過ぎて、恰好がつかないよ。つまらねえ隱しだてをすると、大變な濡れ衣を着なきやならないが——それも覺悟をして居るだらうな」

「——」

「お前が夜中に兩國橋を渡つて、この家へ來たのを、見たものがあるとしたらどうだ」

「——」

「お峯と逢引したならしたと、眞つ直ぐに言はないと、飛んだことになるよ」

「相濟みません、親分さん、——店に居ると反つて人目がうるさく、とりわけ御新造さんがやかましいので、私は時々外へ泊つて、此家へ通つて、お峯さんと逢ふことにして居ります」

それは不思議な逢引でした。わざと他所の家へ泊つて、自分の家へ忍んで來て、逢引をするといふ、若い男女の細かい苦心は、平次には想像がつきません。

「誰が一體、お前とお峯さんの仲を割かうとして居るんだ」

「家中の者皆んなでございます。主人は若旦那の御婚禮で味をしめて、私のやうな貧乏人のところに、一人娘のお孃さんを嫁にくれる筈もなく、若旦那樣も私とは反が合はず、殊に御新造樣はやかましい方で、私とお孃さんが、親しく口をきいても目に角を立てます。私とお孃さんは、思案に餘つて、私が外へ泊つた晩、そつと通つて來て、橫の路地から入つて、お孃さんに戸を開けて貰ひ、お孃さんの部屋で逢引をすることにして居ります。幸ひと申しては變ですが、

旦那様はお耳が遠くて、少しくらゐのことでは氣がつかず、若旦那様方のお部屋は離室で、ぐつと遠くなつて居ります」

「離室の窓から入るやうなことは無いのか」

「飛んでもない。離室は鬼門のやうなもので」

「昨夜は、何刻に來て何刻に戻つた」

「横川町を出たのは宵のうち、——夜半に此處へ着いて、曉方近く戻りましたが」

「二人一緒に外へ出なかつたか」

「あんまり月がよかつたので、路地から表通りへフラフラと新し橋の邊まで出かけました」

「誰にも逢はなかつたのか」

「家へお嬢さんを送り込んで、いざ別れようといふ時、妙なものを見ました」

「妙なもの」

「私もお嬢さんも、あれは唯の人間ではあるまい。お化か、物の怪か、惡靈のやうなものかと、暫らく膽をつぶして立留りましたが、それが何處ともなく姿を隱したので、お嬢さんは家の中へ、私は横川町へ戻りました」

「どんなものだ」

「人をおどかすやうな、踊を踊るやうな、背が高くなつたり低くなつたり——」

時松の話はこれで全部でした。平次は其處に時松を留め置いて、相模屋に引つ返し、娘のお

峯を呼出して、耻かしがるのを、いろ〳〵撫めすかし乍ら訊き出すと、この話も、符節を合せたやうに、時松の話と一致します。

尚ほも下つ引を二人走らせて、横川町の時松の親類と言ふ家に訊かせましたが、時松は店に用事があると言つて宵のうちに戻り、夜が明けてから又横川町に來たといふ、時間の關係もピタリとして居りました。

平次は尚ほも、三味線堀のお朝といふ女のところも覗いて見ました。が、これはすつかり當てが外れてしまつたのです。といふのはお朝はもう相模屋の若旦那榮三郎に捨てられて、次のパトロンを見付けて居り、

「あんな薄情な人はありませんよ。聽くと近頃は、お隣の御新造と仲がよくなつて居るんですつてね」

などとすつぱ抜くのです。

「お隣の新造といふのは誰だえ」

「金貸しとか地主とかのお神さんで、商賣人も及ばない派手な人ですつて」

それは多分、榮三郎などと一緒に、江の島へ遊びに行つて居る、多之助の女房お若のことでせう。あの女の水々しさと仇つぽさ、透き通るやうな青ずんだ美しさを思ひ出して平次は妙に思ひ當るものがあるのでした。

尤もさう言ふお朝といふ女は、肥り肉で赤ら顔で、充分色つぽくはあるだらうが、何んとな

く小汚ない感じのする中年増です。

五

「わツ、驚いたの驚かねえの」

八五郎が飛込んで來たのは、その翌る日のまだ朝のうちでした。

「どうした八、お前の留守に、お膝元の佐久間町で、飛んだ騒ぎがおつ始まつたぞ」

平次は朝飯が濟んだばかり、これから向柳原へ出かけようといふ時でした。

「昨夜宵のうちに、急の使ひをもらひましたよ。一度江の島を訪ねて、それから片瀬と聽いて廻つたとかで、思ひの外使は遲くなつたやうですが、生憎あつしは釣船に乘つて沖へ出て居て、片瀬の宿へ戻つたのは夜中近くなつてからでせう、——ところが、片瀬の宿は、引つくり返る騒ぎです」

夜通し江戸へ飛んで來たにしても、八五郎のあわてやうは尋常ではありません。

「片瀬で何が始まつたんだ」

「地主の多之助が死んだんですよ」

「何んだと？」

「相模屋の隣りの大地主、下谷から外神田へかけて一番と言はれた、綺麗な女房を持つて居る

男ですがね。金があつて女房が美人で、果報負けがしたんだらうと言ふけれど、あんな綺麗なのを遺して死んぢや、多之助も浮ばれませんね」

「まア、詳しく話せ。話がこんがらからないやうに、お前の下手な談議なんか抜きにして先づ筋を通せ」

平次は備へを立て直しました。事件の底に、容易ならぬものを感じたのです。

「沖へ釣に行つたのはほんの三、四人、あとは宿で呑んで居ましたよ。すると、江戸からの急の使ひで、相模屋の御新造が殺されたといふ手紙でせう。殺されたお吉さんの夫——相模屋の若旦那の榮三郎は、すぐ仕度をして江戸へ歸りました」

「たつた一人か」

「あつしは釣に出かけてまだ戻らず、あとは醉つ拂つて居て役に立たなかつたさうで、現に地主の多之助などは、つぶれてしまつて、裏の六疊で休んでゐたさうですよ。それから一刻ほど經つて、あつしと釣仲間は歸り、その話を聽いて放つても置けません。兎も角も、役目のあるあつしだけでもと、仕度をして裏の座敷で一人で寢て居る多之助のところへ挨拶に行くと——」

「多之助は死んでゐたといふのか」

平次は少し八五郎の話術がもどかしさうでした。

「こんな驚いたことはありませんよ。地主の多之助は、自分の首に丈夫な細引を卷きつけ、その端つこを自分の足に縛つて、足を伸ばせば自分の首が獨りで締められるやうに仕掛け、首を

縊つて死んで居るぢやありませんか」

「待つてくれ、八、大地主の金持の、内儀が下谷一番綺麗な多之助は、何が不足で首なんか縊つたんだ。そんなに首を縊り度きや梁にブラ下がる術もあるのに」

「それがわからないので、皆んな評議しましたよ。どう考へたつて、多之助は首を縊る男ぢやない。金があつて、身體が丈夫で、酒が強くて、——あばたで、力自慢で、あまり女の子には持てませんがね」

「隨分醉つて居たのか」

「朝からの酒びたりで、二三升は呑んだことだらうと思ひます。ベロベロに醉つてしまつて、二三人で裏の小座敷に引摺つて行つたといふから」

「首にかけた繩の結び目はどうなつてゐたんだ」

「罠になつて居ましたよ。グイと足を踏み伸せば、首の罠が締つて、そのまゝ縊れ死ぬやうに」

「他に變つたことはなかつたのか」

「あつしが見付けたときは、すつかり息が絶えて、冷たくなりかけて居ましたが、死に際に、餘つ程ひどく涎を流したと見えて、顎の下のあたりから、首の後ろの罠の結び目へかけて、グツシヨリ濡れて居ました」

「他に？」

「すぐ側に、鳥の羽が一枚落ちて居ました。百姓家が近いから、風に飛ばされて入つて來たの

かも知れませんが、親羽毛で、なか〳〵確かりしたものでした」

「――」

平次はすつかり考へ込んでしまひました。

「細引で罠を拵へて自分の首をくゞらせ、足を伸ばして自分で首を絞めるといふのは、新手ですね」

「首縊りの新手なんかつまらないぢやないか。そんなに死に度きや、何んだつて梁にでもブラ下がらなかつたんだ、――ところで、話はそれつきりか」

「それつきりですよ。兎も角も、地主の多之助の家へ知らせなきやならないから、あとのことは他の人に頼んで、あつしは片瀬から飛びましたよ。駕籠なんか雇つて居るより、あつしの足の方が餘つ程早いんで」

「――」

「藤澤へ來ると、相模屋といふ茶店の表通に五六人の人が立つて騒いで居るぢやありませんか。覗いて見ると、店の障子が二枚、モロに折れて、酒樽が引つくり返つて、呑口が飛んだと見えて、店中が酒の洪水だ、――訊いて見ると、一刻ばかり前、江戸の人が通りかゝつて、喉が渇くからと、冷で一杯所望し、それを呑むうち、樽に凭れて突つ轉がし、どんな弾みか呑口を抜いて、障子を二枚モロに折つたが、文句を言ふ隙もなく、俺は江戸の佐久間町のもので、同じ暖簾の相模屋を名乗る者だ。それもこれも何んかの縁、すまねえがこれを取つて置いてくれと、

小判を三枚抛出して、逃げるやうに江戸の方へ行つたといふことで」

「相模屋榮三郎だな、あの男は酒を呑むのか」

「道樂者のくせに、酒は呑みません」

「それから」

「遊行寺の前を戸塚の宿の方へ拔けようとすると、道傍に一人の男が休んでゐるぢやありませんか。夜更けのことだし、物騒でもあると思つて、ヒヨイと顏を覗くと、それは相模屋の若旦那榮三郎ぢやありませんか」

「――」

平次は默つて先を促しました。

「おや、若旦那ぢやありませんか、どうして斯んなところに。お前さんは、一刻も前に藤澤を通り過ぎた筈だが――といふと、八五郎親分、飛んだ縮尻をしましたよ。元氣をつけるつもりで、馴れない冷酒を呑んだは宜いが、糟臭い地酒だつたせゐか、惡醉がして一と足も動けません。此草の上に寢轉がつて、一刻ばかり醉の醒めるのを待つて居りました。生憎夜更けで、駕籠も通りません、――と言ふから、抱き起した上、引抱へるやうにして歩いたが、足元もしやんとして居るし、第一少しも酒臭くないのも癪にさはるぢやありませんか」

「妙なものが癪にさはるんだね、――尤もお前の方が酒臭かつたかも知れないぜ」

「飛んでもない。あつしは釣船から這ひ上がつたばかり、酒なんか呑んぢや居ません、――考

へて見ると、相模屋の若旦那は、夜道が淋しくなつて、あつしの追ひつくのを待つて居たんですね」

「お前が、後から來るとわかつて居たのかな」

「さうとでも思はなきや、辻褄が合ひませんよ、——其處から少し行くと、空駕籠を擔いだ二人の人足に逢ひましたが、二人の人足は若旦那の顏を見て、おや旦那は一刻も前に戸塚の方へ行つて、間もなく、藤澤の先へ引返したやうでしたが、忘れ物でもしたんですかえ——と言ふぢやありませんか。若旦那の榮三郎は少しあわてて、——そいつは人違ひだらう、私は引返した覺えはない——と言ひましたが、月は良いし、人通りはなし、物馴れた雲助が、旅人の顏を間違へる筈もありません。あれは矢張り、後から來る私を、一刻以上も道を往つたり來たりし乍ら待つて居たんですね」

と、八五郎の甘さ。平次はそれを、默つて聽いて居りました。

六

「ところで、榮三郎はお前と一緒に江戸へ歸つて來たのか」

暫く經つて、平次は顏を擧げました、何んとなく屈托した調子です。

「戻つて來たのは、今朝の卯刻半（七時）近かつたでせう。隨分骨を折りましたよ」

「若旦那の榮三郎は、何んか話さなかつたか」
「戸塚から問屋場の駕籠に乘つて品川まで通し、品川から駕籠を換へて、佐久間町の相模屋まで乘りつけたんですもの、口を利く遑なんかありやしません」
「――」
「相模屋に着くと大變だ『俺が居さへすればこんな慘い目に逢はせなかつた』と、若旦那の榮三郎はお吉さんの死骸に取すがつて、男泣きの大泣きでしたよ。氣の強い駒込の長五郎――嫁の親父の、あの祿でもなしも、聟の榮三郎の愁嘆場に膽を潰して、マアマアと慰め方に廻つたのは、變な圖でしたよ」
「お前は地主の多之助の死んだのを知らせる筈ではなかつたのか」
「飛んで行きましたよ、相模屋の方は宜い加減にして。すると弟の跛足の多見治は、――たうとうやつたのか――と變なことを言ひました。美しい内儀のお若さん、あれは大した女ですね。亭主の死んだことを聽くと、思はずニツコリして、――『御苦勞樣、――でもねえ、私はどうしませう』と、いきなり泣き出したのには弱りました。何しろ、私の胸倉をつかんで、グイグイやり乍ら、大きな聲を張り上げるでせう。お隣りの榮三郎も變なら、地主の御新造も正氣ぢやありませんね」
「厄介なことだな、八」
話を聽くうちに、平次は次第に沈鬱になつて、深々と考へ込んでしまつたのです。

「もう一つありますよ、親分」
「何があるんだ」
「三輪の萬七親分が出しや張つて、お吉殺しの下手人を擧げたさうですよ」
「誰だ、その下手人といふのは？」
「相模屋の手代の時松と、あの榮三郎の妹のお峯」
「なんだと」
「二人は前から出來て居たんですつてね。町内のあつしに氣取らせないくらゐだから、今の若い人は、大した手柄で」
「尤も、お前なら、出來ないうちから吹聽して歩く」
「まア、そんなことで、――それは兎も角、あの晩も二人は逢引して居たと、本人達が言ふんだから、嘘ぢやないでせう。時松とお峯の二人を割かうとしたのは兄嫁のお吉で、お吉が邪魔になつてならないから、――時松は横川町の親類の法事に行つたことにして、夜中に佐久間町に歸り、お峯の手引で、兄嫁のお吉を殺した、――と斯ういふことになるわけださうですよ」
「待つてくれ。そんなら、お吉の窓の戸に細工をしたのは誰だ、――お峯に引入れて貰ふくらゐなら、あんな手の混んだ細工は無駄ぢやないか」
「ヘエ」
「それから、横川町の親類の家から抜出す時も、あの男は大手を振つて出て居るぜ」

「？」

「俺は下手人は外にあると思ふよ。時松とお峯が、外で逢引して居た時、――主人の榮右衞門は耳が遠い。嫁のお吉が殺されるのも氣がつかなかつたに違ひない」

「だが、――最初は、窓の戸の細工をした人間と、お吉を殺した人間と、同じ野郎だと思つたからわからなかつたのだ、――片瀬の宿屋で、地主の多之助が殺されたと聞いて、始めて本當のことが解つたよ」

「多之助は殺されたんですか」

「當り前よ、そんなにベロベロに醉つて、細引に罠を拵へたり、結び目を濕したり、足を伸せば首が縛るやうにしたり、――鳥の羽毛で擽ぐつて、前後不覺に醉つた者が足をグイと伸ばして自分で自分の首を締めるやうな仕掛をしたり――そんな器用なことが自分で出來るものか」

平次の説明は次第に事件の核心に觸れて行きます。

「すると、親分には、下手人はわかつて居るんですか。相模屋の嫁のお吉と、地主の多之助を殺した奴が――？」

「わかつたつもりだ」

「どうして縛らないんで？」

「憎い奴等だ。地獄の釜の中へ、眞つ逆樣に叩き込み度いほど憎い奴等だが、仕組みが巧過ぎて、手も出せない――口惜しいが極め手になる證據が一つも無いのだよ」

「誰です、それは？」

「待て〳〵、俺はきつと縛つてやる。こんな質の惡い人間を、そのまゝ許しては置けない」

錢形平次は日頃にもなく躍起となるのです。

× × ×

だが、錢形平次もこれほど、重大な縮尻をしたことはなかつたのです。お吉殺しの下手人も、多之助殺しの下手人も捉まらず、——いや、下手人は解り過ぎるほどよく解つても證據が無いために擧げられず、全くの無實と知り乍ら、三輪の萬七の縛つた、時松とお峯を救ふ手もなく、悶々として七、八日は日が經つてしまひました。

お吉と多之助の初七日が過ぎたある日の朝。

「わツ、親分、大變ツ」

八五郎の大變が、髷節を先に立てて、平次の家へ飛込んで來たのです。

「どうした、八。地主の多之助の後家がどうかしたのか」

平次は先を潛りました。

「あの色後家は氣が變になつただけれど、相模屋の若旦那の榮三郎と、多之助の弟の多見治は、お互に斬合つて、共斃れに死んでしまひましたよ。地主の家は血の海、あんな物凄いのをあつしは見たこともない」

さすがの八五郎もふるへあがつて居るのです。

「たうとうそんなことになつたのか」

平次は仕度もそこ〳〵八五郎と一緒に飛出しました。佐久間町三丁目、地主多之助の家、初七日あけたばかりのその家の中を、斑々たる碧血に染めて、隣の相模屋の若旦那榮三郎は、縁側の下に幾十とも知れぬ傷を負うて斬り殺され、多之助の弟で——今は此家の主人の多見治は、居間の八疊に、相手の一と突きを、胸のあたりに受けてこと切れて居りました。

その慘憺たる有樣を眺めて、多之助の女房だつた、妖艶無比のお若は、部屋一パイに飛散る血を、滿山の花とでも思つたか、雛毛氈を敷いて、冷酒を呷り乍ら、相好を崩してゲラゲラと笑つて居るのです。

「八、俺が愚圖々々して居たので、天道樣が裁いて下すつたよ」

「これは一體どういふことなんです、親分」

「榮三郎と多見治は、大變な約束をしたのだよ。榮三郎は多見治の兄の多之助を誘ひ出して、旅先で殺す代りに、多見治は、榮三郎の女房のお吉を殺す約束をしたのだ、——榮三郎は女房のお吉の部屋に、外から入れるやうに窓の戸に細工をし、江の島へ行つて自分に疑ひのかゝらないやうにし、その留守に多見治は、榮三郎の部屋に忍び込んで、お吉を殺した。少しくらゐ音を立てても時松とお峯は留守。主人の榮右衞門は耳が遠い」

「ヘエ」

「榮三郎は旅先で多之助を殺すつもりだつたが、機會がなくて愚圖々々して居るうちに、多見

治の方がお吉を殺してしまつたと聽いて、江戸へ引返すと見せて、戸塚から引返し、片瀬の宿で、醉つ拂つた多之助に仕掛けをして縊り殺し、二人共ぬからぬ顏でをりを待つて居たのだ」

「ヘエ、太てえ奴等で」

「多見治はお吉を殺すわけがなく、榮三郎は多之助を殺すわけがない。こいつは百年經つてもわかりつこはないと安心して居たことだらう。ところが、榮三郎はお吉を殺して貰つたのは、多之助の女房のお若に氣があるからで、多見治は、兄の身上も欲しいが、それよりも兄嫁が欲しかつた」

「あ、なるほど」

「獲物の分け前で、二人は氣のふれた狼のやうになつた、——そして、お互に死ぬまでやり合つたのだらう」

「怖いことですね」

「それを見て、浮氣で勝手な女だが、お若はさすがに氣が變になつた。二人の男の爭ひは何んとも言ひやうもないほど凄かつたに違ひない」

「歸りませう、親分。こいつは不氣味で見ちや居られませんね」

八五郎は口にも柄にも似ず氣の弱いところがあつたのです。

「お前は大番屋へ行つて、御係の方に申上げ、時松とお峯を救ひ出して來い。あの惚れ合つた二人を助けたら、少しは氣が晴れるだらう」

「親分は？」
「俺はあとの始末をする。十手を持つ者の罪亡ぼしだ」
平次はさう言つて、二人の死骸を片手拝みにするのです。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第二十一巻　闇に飛ぶ箭」同光社
　　1954（昭和29）年2月15日発行
初出：「オール讀物」文藝春秋新社
　　1953（昭和28）年10月号
※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2016年12月24日作成
2017年3月4日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控
美しき獲物

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/